

からないのは産科婦人科だけだ」と苦笑されたさうである。然しこの間にも小康を得ると越後、九州までも俳友を訪ねての旅行をしてゐるが、晩年はずつとギブスベッドに横はつて闘病と作句の生活を續けたのだつたが、後で考へればよくも堪へてゐたことだつたと同情もするのだつた。旅行に際し、又病牀にあつての不自由の際に、所々方々の句友諸君にも随分と世話をかけたと思ふのであるが、龍子は自己の畫事に没頭、そして出嫌ひといふ性分から、茅舎の句友との交際、交渉など云ふことは全く他所の世界であつて、現在は懇親を頂いてゐる深川正一郎氏にしても茅舎の死水を取つて頂いてからの因縁と云ふやうな身勝手な考へ方であるのだつた。それと云ふのも實は龍子はその根本に於て、茅舎の生前に於ての茅舎俳句に就ては、正覺庵の寄宿に依て得た佛語を適宜に活用してゐるな……位の程度にしか考へてゐなかつたのであつた。處がその歿後に於て一躍名をなし得たといふことに、これは〳〵の感さへあつたのである。それにしても甚だ遅ればせながら彼をして然かく誘導を賜はつた虚子先生の先覺に就ては彼の兄とし深く感謝しつゝあるのである。

さて、本書を纏めるに就ては……茅舎歿後の彼の俳句の出版に就ては一切の切り盛りを深川氏に任せて、龍子としては全くの無責任といふ勝手を許させて貰つてはゐるのだが、この一書の出版また然りであつて、氏の裁量を中心として角川源義氏始め多くの方々に芳慮を頂いたことをこの機会に於てこゝにまた兄としての禮意を述べる次第です。

昭和三十三年八月

川端 龍子

年譜

明治三十年（一歳）

八月十四日、東京都日本橋區蠣殼町二丁目拾五番地に生れた。本名信一。父は信吉（四十三歳）。母ゆき（三十歳）畫家川端龍子の異母弟にて十二歳の年下である。（従來茅舎は明治三十三年生として區別所にも届出あるも、酉年の生れであることは生存せる近親の立證するところであり、小學校卒業年次、中學校卒業年次により明らかなるため、以後本年譜により訂正する）

明治三十六年（七歳）

三月、日本橋區、私立有隣代用小學校に入學した。

明治四十二年（十三歳）

將來醫師になるつもりで四月十日、獨逸協會中學校

（現在の獨協學園）に入學した。依然健康にして蠣殼町の家より通學した。當時龍子は大森區新井宿に居住。

明治四十五年（大正元年）（十六歳）

中學三年生として即位式を參觀したること生存同級生の話に詳かである。當時、級中にて同覽雜誌などの世話役であつた。

大正二年（十七歳）

兄、龍子、米國に遊學。

大正三年（十八歳）

三月三十一日、第二十三期生として、獨逸中學校を卒業す。

大正四年（一九歳）

俳誌「藻の花」に俳句を投稿してゐた。秋「ホトトギス」へ投句をはじむ。